

再びの挑戦 桜川たつる デビュー 『哀愁おけさ』『だって愛だから』

久仁京介

新潟市亀田の出身、桜川たつる君が10月16日再デビューした。かつては新発田市出身、川中美幸さんの「ふたり酒」や「浪花恋しぐれ」でお馴染みの作詞家たかたかし先生と出会い、その際に桜川たつると命名され、2017年「東京の人」という作品でデビューした。政治家の選挙活動じゃないが、地盤看板カバンのない歌手活動は不十分、そこで培った一番の強みとなったキャンペーン活動は、街ナカ、駅ナカ、場所などを選ばずに、許されても許されなくても、やれるところでやってのけるというストリートキャンペーンだった。

今回の発売日にも、やはり一番先にやった所は東京のど真ん中、銀座に近いJRの有楽町駅を選ぶという度胸のよさ、図太い神経を強みとしたところだ。もちろん誰も振り向きも興味も持たれはしなかったようだが、これがいつしか強みとなると信じている。

久仁は2024年の春に桜川たつる君と出会った。

ディレクターがボクに「せんせい、新潟の出身だよ」というので同郷のよしみも手伝ってか、話もはずんで作品作りがスタートした。

ちょっと甘いマスクは危なっかしさも手伝って、彼の第一印象で閃いた呼び名は<チャラ男>でした。ニコニコもニタニタもある顔の印象は人なつっこい風情だ。

現在、新潟を活動拠点としているが東京へ拠点を移すことも決めているという。東京と新潟の行き来はいつも車で元気な若者と感心したものだ。

歌手の生命は声だ、音色が面白い、上手いかどうかは受け止め次第だが、印象に残るのは真っすぐに響く低音の声だ。唄うテクニックとしてはまだまだ疑問はあるが、聴けば判ってもらえる。

さて作品の内容は、2023年世界遺産登録されたばかりの、佐渡島を舞台にした定番演歌として書いてみた『哀愁おけさ』を、氷川きよしを世に出した巨匠水森英夫さんに作曲して頂いた。佐渡の暮らしを風情に残し、男女の恋愛に陰をおとした絡み合い、悩ましい女ごころをお届けします。もう一つの作品は、身についたストリートパフォーマンスで目を引くような、足を引き止められるかに挑戦する『だって愛だから』を作った。